
本気で小説家になろうとしている女の話

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本気で小説家になろうとしている女の話

【Nコード】

N5498X

【作者名】

朋次郎

【あらすじ】

前編、中編、後編に別れています。

前篇

寒い寒い冬のある朝。時刻は午前5時半。

スナック菓子スナックの空袋や文庫本、雑誌類がちらかったワンルーム。独身女性の1人暮らし。綺麗とはいいがたい部屋だ。その中で起き上がったばかりの住人、数子スウコは1人部屋を見回して赤面していた。部屋の中央にたたずむ昨日の服装のままの自分の姿。メイクも落とさず、髪はばさばさ。

寒さは感じなかった。自分が自分で恥ずかしくてそれどころではなかったのだ。

今数子スウコはひどい自己嫌悪に陥っている。昨夜は1人で3件の飲み屋をハシゴ、帰途に見かけたたこ焼き屋でたこ焼きを買ってほおばりつつ徒歩で帰る。マンションの1階にあるコンビニに入りお菓子類を大量に購入。

帰宅するなりお腹がいつぱいなのに尚、それらの食べ物を食い散らかしていた。早い話がやけ食いの1日だったのだ。昨日は・・・お腹がまだ満腹だ。食べ物がのど元までつまっている感覚がする。数子は昨夜の自罰的な行為を全部思い出して嫌悪の感情をとくと味わっていた。

ああ、お酒が入っていたにせよ、この私が、私としたことが泣くなんて。スウコが泣くなんて。この私にふさわしくない泣き方をするなんて。深酒、過食、泣き寝入り。

どうして、この私がそのような事を？これでは普通のつまらない女の子と変わらないではないか！

私は一生一度の人生、楽しく気楽に暮らすのがモットーなのに、そうして生きて言っているスウコなのに。どうして昨夜のような醜態を演じるのか。スウコともあるうものがどうして、どうして・・・？

ふと昨夜寝入る直前に何かを書いてのを思い出して探し出した。
確か詩だった。くしゃくしゃになったチラシの裏紙に書いたその詩
は、自分の字ながら判読しがたかった。それでもスウコは小さく声
を出して読み上げた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

現在、今、この世にいる

スウコはとてもあわれでみずばらしい

働いて1人で生きていけるだけのお金は稼げてても本当は何もでき
やしないのだ。

スウコはますますもがいて、あせっている

スウコはもうじき29歳で来年は30歳になる

スウコは、

作家として世に一石を投げ人々の思考、思想に影響を与える人
になる

偉大なる作家、偉大なる女人、偉大なる詩人

そんな夢を見る(だけど現実には厳しくて)

スウコは自分を世に出すべく、その手段として小説を幾つも創作
して投稿した。

だが何の賞も取れず誰にも注目されることもない

自分で苦勞して創ったモノは何1つ何にもなたない

一体、私はここで何をしているか

一体、私は何をしたいのか

一生このまま世に出ずただの事務員で終わってしまうのか

ああ、いやだいやだ

スウコは泣いてしまう

スウコは涙をこぼし声をあげて泣いてしまう

泣いてしまったえいえんに……

以下は判読不明だった。

ここまで読むと数子はチラシをさらにぐしゃぐしゃにして丸めて
わめいた。

わーーーーっああっもっつ！！

数子、あんたはねっ！

小説家をめざしているんでしょっ！

小説家になるために田舎の両親のもとを飛び出して、この東京に
やってきたのではないか？それゆえ誰ともつきあわずにただただ小
説だけを書いてきた。勤務前も勤務後も土日祝日関わらず時間があ
れば書いてきた。小説や詩はもう自分でも数えきれないぐらいに書
いてきた。

数子が目指すものは……

上品かつ面白い作品

もちろん書くものはすべてベストセラ―

映画化や劇にされて当たり前

文学史上に残る巨匠と呼ばれる大作家

ノーベル文学賞ももらう

もちろん熱狂的なファン多し

人々に夢と希望を与えるすばらしい女流作家、容姿は美しく高邁
なる人格

世界中のあらゆる人種を揺さぶる神のような作家

……女神だ。私は……。

数子の目指すものはつきつめていえばそれらだった。後には人々の尊敬を得る「偉大なる作家」になるつもりでいるので日々の言動にも気を配って生活していた。

だから昨夜のような醜い自分を振り返って自己嫌悪に陥ったのだ。昨夜泣きながら飲み屋で酒を飲む自分、まだ人通りのある中、歩きながらたこ焼きをほおぼる自分、コンビニでふらつきながらスナック菓子をかごいっぱいにほურიこむ自分、帰宅後も着替えずお菓子を飲み込みくだらな文章を書く自分。

どれも許せない醜い自分だった。

こんな自分をもし誰かが、知っている誰かが見ていたら・・・

私は後の作家の「数子」なのに。数子はそんなバカな真似はしなはずなのに。みっともない自分を覚えられてしまったらどうしよう。

自分の感情をコントロールできなくてどうして偉大なる作家になれるのか。

私は「数子」なのに。

私は昨夜の自分に深く恥じ入る・・・

そしてそんな自分に追いやった1人の少女を思い出した。

そして今までの自分をも思い出した。

中篇

数子は大都会印刷株式会社にこの11年間勤務している29歳の独身女だ。5年以上連続勤務している熟練した正社員だけが入室できる貴重印刷物監査室に所属している。ここは印刷物のうち主に銀行が発行している通帳や小切手類を工場で刷った後、汚れや印刷ずれがないか厳しくチェックするのが仕事だった。

手には手袋、口にはマスク、髪には帽子、全身を覆う白いエプロンをつけて日がな1日、新品の通帳達とにらめっこする。通帳の種類もいろいろあって日によって検品する銀行も違う。

あらかじめ予定は組まれているのかもしれないが、不正がおこらないようにするためか今日はどこの銀行をするとかの会話もご法度。そして通帳の冊数も厳重に管理されている。

数子のする仕事は正に検品だけなので、退屈といえば退屈な仕事だ。後の大作家になるはずの数子にはふさわしくない仕事だと自分では思っていた。それでも勤務を続けているのは身体が楽し、ここだと働きながら小説の「ネタ」をゆつくり考えられるからだ。

「大都会印刷」という後大層なネーミングの会社でも実際は社員数わずか百余名、うちパートのおばちゃんたちが半数以上。給料はいとはいえないが、働きやすい気楽な会社だった。

数子は会社の上層部でも怖いもの知らずといったベテランやパートのおばちゃん連中にも一目おかれた存在であった。それは入社10数年という社歴でも、監査室での検品の手腕がいいからでもなく、ただ「作家志望」という肩書きがあったからだ。

数子は文章を書くのが好きで好きで小学校、中学校、高校と新聞部に所属し、高卒で今の会社に就職してからは社員報をただ1人で発行、発行、以来月刊4ページずつでも一度も休まず会社にも貢献し続けている。数子は昔から好意ある注目の的だった。

頭がよくて明るくて文章が上手できつとこの人は世に出る人だ。

いつまでもこの会社にくすぶっている人ではないと思われていた。

11年前の18歳の数子。入社早々にして、この会社に社員報がないのはおかしい、作りましようよ、私がやります！と社長に直接提案し、社内で一気に有名になった。

以来社内の情報収集集めにかけまわり、人事課営業課顔負けの情報通である。記事は社員の冠婚葬祭、印刷業界での話題がメイン。残り数子の作った季節の詩で埋め、たまには文学談義、数子おすすめの本の話題でしめくくる。

数子はいつぱしの文学家、評論家気取りだった。

数子は社内だけでの有名人だったがたった一度だけ社外での・・つまり世間での知名度が上がった頃がある。入社して2年目の話だ。20歳の成人式を迎えたときに自分の仕事をコミカルに書いた50枚ほどの短編がはじめて有名出版社主催の文学賞の佳作になった。あの時は2500編以上の応募作から佳作3編、入選が1編だけだったから大したものだった。

数子は社員報で自分の佳作受賞をトップの見出しで大きく載せ会社中を大騒ぎにさせた。社長からはこの会社に数子がみるのは栄誉なことだと言わしめ、数子の得意の絶頂期だった。出版社の編集部からは励ましの言葉をもらい、数子は本格的にプロの作家を猛然と目指し始めた。

「必ずや、作家として成功して、世の中で輝いてみせるという強い信念をもって小説を書いた。

小さいころから数子の書いたものはいつでも人に褒められた。小学校の先生は年の割に並はずれた文章構成力を示す数子に驚いて、この子はきつと小説家になれますよと父親に予言したくらいだった。10歳のときに夏休みの作文コンクールで銀賞を取り、16歳のときには読書感想論文の全国大会で佳作をとった。先生もクラスメ

トも家族も親戚もみんなが、数子の輝かしい未来を期待した。

そして大学進学をすすめる皆をふりきり、早く自活したいからと説得して親元を遠く離れてこの東京にやってきた。

そして自分ひとりだけの部屋を借りて、思い切り小説創作に打ち込んだ。そして・・・あの20歳の佳作受賞。価値ある佳作。

今、29歳の数子はそれが自分の運のあつた一番幸せな時期だったと思えてならなかった。その文学賞佳作以来、どんなに力を入れて書いてもボツばかりだったから。一次選考にもかすりもしない。そのうちに励ましてくれた編集部からの連絡も途絶えた。

29歳。本格的に小説を書きはじめてから10年以上はたった。なのに、ぱつとしない・・・。

職場で明るく元気にふるまう数子の胸中に影がついてきた。30歳、いや40歳や50歳になっても作家になつた人がいる。100歳で詩人として大ヒットを飛ばしたおばあちゃんもいるではないか。私は小説家になれなくとも、文章を書くのは大好きなのだし、これはこれで幸せだと思つたが、小さい頃から「若くして偉大なる大作家」を夢見ていた数子にはつらい現実だった。本当に本当に数子は小説を、小説だけを書いて生きてきた。

数子の頭は考えごとで段々と重くなり下を向いてきた。足元のすぐ近くに1冊の新しい雑誌が見えた。それを器用に足で拾い手で受け止める。そしてうつむいたままパラパラと本をめくつた。

そして・・・例の新人賞発表のページを見た。すでに雑誌には開け癖がついていて目次を確認しなくともさつと開けた。

もうこうして自分の応募した賞の発表を何回めくつたのだろうか。一度も出版社から受賞通知を受け取つたことがないにもかかわらず、こうして賞の発表の時は自分の名前が載っていないとわかつているにもかかわらず、自分の名前がどこかに載っているのではないかとときどきして探るのが常だった・・・。

今回の新人賞発表がとりわけ数子にシヨックを与え、ヤケ酒、ヤケ食いの醜態をさらしたのは、理由があった。1つは数子の今回の応募作は今度こそと力と心をこめて書いた長編の力作だったから。これは数子の父親の半生、高校卒業から小さなスーパーマーケット経営にいたるまでの過程をコメディーぽく書いたもので、数少ない同人の友人にもいい評価をもらえた。彼は辛口の批評しかしないのに、ほめられたので、かなりの「もしかして」という期待をもっていった。

だけど、全然。かすりもしなかった。

これだけなら、ああまたか・・・、私に日があたるのは一体いつの話しなのかがっかりするだけで終わるのだが今回は違った。

もう1つの重大な理由。今年是最優秀作の大賞が出た。それを受けたのが13歳になったばかりの少女の作品だったからだ。

この大賞を射止めた少女の作品は昨日購入した雑誌に掲載されている。あらずじ紹介では彼女が初めて書いた小説だという。内容はある平凡な中学生の1日を書いたものだという。好きな人、受験、家族の話。ありふれたどうとことのない話らしい。

「天才少女現れる！」との大きな見出しが嫌でも目をひく。延々と連なる撰者の大作家の「良い批評」将来の作家としての保証をうけたのも同然だった。

全くの素人で初めて書いた小説で大賞を射止め、天才少女と言われてなんて幸運な子かしら！

この子の写真も大きく出ていた。まだあどけなさの残るいまどき珍しいおかつぱで、セーラー服姿のやややせぎみの女の子。数子はこの写真を見るなり嫉妬のあまりこの少女の目から口にかけてがりつと爪でひつかいてやったくらいだ。かわいいかわいい女の子。

数子は憎くて憎くて、必死に写真をびりびりに破いてしまいたい衝動を抑えた。

その写真の下にキャプションがついている。

東京都に生まれる・・・都立×中学2年在学中・・・クラブ活動は音
楽部・・・父親は 大学文学部教授の ・・・母親は作家の

・・・

数子はより眉を逆立てた。

何よ、これ、いわゆるコネ受賞じゃないの！！

文学部教授の父親によくテレビに出ている作家の母親！
だったら、だったら！私よりずっと有利じゃないの！！

「・・・ああ、くやしい・・・くやしい・・・」

後篇

今季、文学大賞をとった少女。

国立文学部教授の父親に作家の母親。文章を書くには一番恵まれた環境に違いない。生まれながらのサラブレッド。顔もかわいい。それでいて、たったの14歳で初めて書いた小説で大賞を取り、「将来を保証されて」「輝かしい未来を保証された」それに引き換え・

わが身を省みて数子は慟哭する。いくら書いても一次予選も通過できない。そういう認められない作品しか書けないのか。私の努力はむなしいだけなのか。

気を取り直した数子はその子が書いた受賞作を読んだ。かわいい顔写真とキャプションをみて「えこひいき」「絶対コネ受賞」という言葉が脳裏をかすめたが、読み進むにつれて自分の顔色が変わっていくのがわかった。彼女の文章自体は平易で幼稚だったが、なんと言おうか全体的に文体が光ってきらきらとまばゆいのだ。

文字が光って見える。

信じられない意表をつく表現文。

誰も考え付かなかった斬新な比喩・・・！

数子は他人の文章の批評ができなくとも、この子に非凡な才能があるのがすぐにわかった。これで処女作！

この作品はヒットするだろう。知名度のある両親のこともあるし、いや14歳の新人作家、かわいい少女作家にひかれてもうすでに新聞やテレビなどのメディアにも取り上げられている。次回作にも取り組んでいるというから、彼女の存在自体ブームになるかもしれない。

数子は唇をかんだ。

自分の夢見ていた華やかな大作家の道の初めをこの少女が見事に

具現しようとしているのだ。数子はくやしかった。

そして自分の今まで歩んできた境遇を思い出した。昨日はそれで涙が出てきて、止まらなくて無性にアルコールを飲みたくなり、夜の街に出たのだ。

飲んで食べて泣いて、泣いて・・・。

それが昨夜の自分だった。

今もまた、昨日と同じ行動を繰り返しそうになる自分に気づいて必死に自分を抑えた。

「自己嫌悪」

数子は放心したように本を手に持ちぼんやりとしていた。

朝日がさらに強くなったようだ・・・戸をあけて日の光を入れよう、気分転換になる・・・。

さつとカーテンをひいた数子は横にある鏡を見てぎよつと立ちすくんだ。

腫れぼつたいまぶた、だらしなく開いた口元、ぼさぼさのヘア。よれよれの汚いパジャマ。

とんでもなく不細工な女の登場だ。

「ああ・・・疲れた、疲れた・・・」

・・・それでも、私は小説を書く。

私は何もしていない。

だから何も先をこされたからといって泣くことはないのだ。

小説を書くのが好きだったら本当に何も泣くことはないのだ。書くことで自分はいやされるはず。認められないからって何も泣くことはないのだ。ねえ、そうでしょ・・・？

数子はほうつとため息をついて、強く目を閉じた。しばらくその姿勢のままじっとしている。数子は心を無心にしたあとカッと目を開けた。

さて私は朋次郎です。

数子さんの話をここまで書いたがそれから先がすすまない。なぜなら数子さんは

- 1、作品応募
- 2、発表を見てがっかりする
- 3、落ち込んだ自分を早急に自分で手当て
- 4、持ち直して元気になって
- 5、小説を書く

その繰り返しを続けているからだ。

不思議なことに彼女は他人の評価を気にしない。気にしているのは自分の小説が「賞を取れるか」どうかということだけだ。彼女を見ていると自己満足という言葉を思い出す。

文中彼女の作品に対して良い評価をしたという同人は私のことだが、私の存在も彼女にとつてはあまり意味がないようだ。

純然たる創作の魅力に取りつかれているとはいえない彼女だが、賞を取るための創作の意欲には敬服する。だが誰とも親しく話せるが誰ともつきあわないし、特に勉強もしていない。

文章の構成力はまあまあ魅力的で一応素人ばなれしていて、最後まで読みとおすのにそんなに努力はいらない。上手な方だと思う。でもそれだけではプロにはなれないことは皆さんもご承知のとおり。才能だけではプロにはなれない。運も才能のうちという言い古された言葉が重みを増して輝いてくる。

プロの最重要条件「この人の作品は「お金を出してまで読みたいか」といわれると躊躇するだろう。読んで、と言われてじゃあ・・一応知り合いだし、（お義理で）読んでやるか、レベル。」

さていわゆるコネ受賞だが、これは現実の世界でもあり得る話だ。ときどきマスコミの水面下で話題にはなるので皆さんの方もよくご存じのはず。誰それさんの娘が小説を書いたとなると、親が知名度

があるほど話題作りにはなるからだ。本にはならなくともつきあい
で編集者は、通常ならば読まない素人の作品でも一応「最後まで読
んで」「感想なり批評なり」としてあげられるからだ。ただの通り
すぎりには大出版社の編集者なんか見てくれないぜ。(今すぐ商品
として売れるか売れないかの判断だけはするから、これからこの人
と一緒に世に出て成長しようとか一昔前の話はもう壊滅している。)
だから出版社としての影響力のある人間から私の家族の作品を見て
やってくれと言われると見てあげるのも仕事のうち。これだけでも
普通の作家志望ではなかなかのぞめない恵まれた環境だ。

実際私の知り合いが某賞に応募したものの、賞をもらうどころか
一次予選にもひっかからなかった。後日選者作家の1人と話をして
いて(そういう立場の人です)「かすりもしなかった」と言うところ
あなたが応募しているとわかっていたら賞をあげたのにな、と言われ
びつくりした話も聞いたことがある。作家ってそうやって気楽にな
れるものなのだろうか? 違うだろうと思う。(当たり前だが、実行に
は至らなかった。これは多分選者のリップサービスもあつただろう
とは思う。この話を教えてくれた当人も信じてはいない。だがあり
えない話ではない。)

微妙な話なのでこのくらいにはしておくが、本気で作家を目指す
ならば最低限この作家希望者がひしめくそして作家志望者が読むこ
の膨大な作品集の中で頭角を現さないとプロは無理だ。それと映像
化やアニメ、雑誌やメディアとの提携。出版社の後押しをもらい敏
腕な編集者とセットになつて売り込みもしないといけない。そうで
もしないと数子さんの望んでいるミリオンセラーまではいかない。

私? 朋の字は気楽にいくさ。

数子さんとはまた違ったタイプなんで。

数子さんと違う意味で作家にはなるのは難しいと思つている。(
佳作や最終選考には残つたことはあるが賞をとらないと意味なし、
ただの人)

書きたいことが山積みで楽しいから書くというスタンスだ。時間がないこともあり、書く時間が取れたら一気に書きまくっている。あとで誤字脱字、言い回しのおかしさに気付くがそのままだ。現実時間も大変に重要なのでこういう時間は我ながら大変に突っ走っているな。(片手で足りる人数だけのお気に入りに入れてくださっている人もいるので、それがすごく励みになっている。ありがとうございます。)

ただ他人に読んでくださいとは言わないようにしている。それと言つと自分にとってこれは自信作というよりはほめてもらいたいという本心が自分でよくわかるからだ。私はそれが恥ずかしい。心理的に自然なことだが、もうプロを夢見る年齢はとうにすぎているからだ。現実のあざとさや厳しさがよくわかる年代になっている。

また小説を読みたい人よりも書きたい人が本当に多いのではないかと思う。だから数少ない読みたい人イコール出版社やメディアにお金を落としてくれる人、は貴重な存在だからテレビや映画とタッグを組んで強力な購買意欲をそそるようコマースヤリズムにのせる。今の時代、小説の版を重ねるだけのブームはありえない。必ず話題の俳優やタレントを使って映像化されている。読者側から沸き上がった小説ブームと言うよりも仕掛けられた小説ブームと違って過言はない。これを良い現象と言うか悪い現象というか考えるだけ時間の無駄なんで、とりあえず自分で思いついた話をここで粛々と綴っている。

それだけ。です。

それであと人間いずれ死ぬから消えるだけ。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5498x/>

本気で小説家になろうとしている女の話

2011年12月20日01時55分発行